

第十六問 次の文章を読んで、後の問に答えよ。

① 行くに従って人が多くなる。しばらくすると一人の迷子に出会った。七つばかりの女の子である。泣きながら、右へ行ったり、左へ行ったりうろろうろしている。おばあさん、おばあさんとむやみに言う。これには往來の人もみんな心を動かしているようにみえる。立ちどまる者もある。▲かたれも手をつけない。不可思議の現象である。

「これも場所が悪いせいじゃないか」と野々宮君が子供の影を見送りながら言った。

「いまに巡査が始末をつけるにきまつているから、みんな責任をのがれるんだね」と広田先生が説明した。

「わたしのそばまで来れば交番まで送ってやるわ」とよし子と言う。

「じゃ、追っかけて行つて、連れて行くがいい」と兄が注意した。

「追っかけるのはいいや」

「なぜ」

「なぜって——こんなにおおぜいの人がいるんですもの。私にかぎったことはないわ」

「やっぱり責任をのがれるんだ」と広田が言う。

「やっぱり場所が悪いんだ」と野々宮が言う。

男は二人で笑った。団子坂の上まで来ると、交番の前へ人がたかっている。迷子はとうとう巡査の手に渡ったのである。

「もう安心大丈夫です」と美禰子が、よし子を顧みて言った。よし子は「まあよかった」と

言う。

② 坂の上から見ると、坂は曲がっている。幅はむろん狭い。右側の二階建が左側の高い小屋の前を半分さえぎっている。そのうしろにはまた高い幟が何本となく立ててある。人は急に谷底へ落ち込むように思われる。その落ち込むものが、はい上がるものと入り乱れて、道いっぱいにふさがっているから、谷の底にあたる所は幅をつくして異様に動く。見ていると目が疲れるほど不規則にうごめいている。広田先生はこの坂の上に立つて、

「これはたいへんだ」と、さも帰りたいそうである。四人はあとから先生を押すようにして、谷へはいった。その谷が途中からだらだらと向こうへ回り込む所に、右にも左にも、大きな葭簀掛けの小屋を、狭い両側から高く構えたので、空さえ存外キウクツにみえる。往來は暗くなるまで込み合っている。そのなかで木戸番ができるだけ大きな声を出す。

「人間から出る声じゃない。菊人形から出る声だ」と広田先生が評した。それほど彼らの声はジンジョウを離れている。

一行は左の小屋へはいった。曾我の討人がある。五郎も十郎も頼朝もみな平等に菊の着物を着ている。ただし顔や手足はことごとく木彫りである。

よし子は余念なくながめている。広田先生と野々宮はしきりに話を始めた。三四郎は、ほかの見物に隔てられて、一間ばかり離れた。美禰子はもう三四郎より先にいる。見物は、がいて町家の者である。美禰子はその間に立つて振り返った。首を延ばして、野々宮のいる方を見た。野々宮は菊の根をさしながら、何か熱心に説明している。美禰子はま

〔出典〕

夏目漱石

『三四郎』

〔著者出題歴〕

- ・センター試験
- ・大阪教育大学
- ・一橋大学
- ・横浜国立大学
- ・奈良女子大学
- ・九州大学
- ・上智大学
- ・早稲田大学
- ・広島修道大学

た向こうをむいた。見物に押されて、さっさと出口の方へ行く。三四郎は群集を押し分けながら、三人を棄てて、美禰子のあとを追って行った。

③ ようやくのことで、美禰子のそばまで来て、「里見さん」と呼んだ時に、美禰子は青竹の手欄に手を突いて、心持ち首をもどして、三四郎を見た。なんとも言わない。

「どうかしましたか」と思わず言った。美禰子はまだなんとも答えない。黒い目をさもものうそうに三四郎の額の上にすえた。その時三四郎は美禰子の二重瞼に不可思議な意味を認めた。その意味のうちには、苦痛に近き訴えがある。すると、美禰子は言った。

「もう出ましょう」女は首を投げるように向こうをむいた。手を青竹の手欄から離して、出口の方へ歩いて行く。三四郎はすぐあとからついて出た。

二人が表で並んだ時、美禰子はうつむいて右の手を額に当てた。周囲は人が、ウズを巻いている。三四郎は女の耳へ口を寄せた。「どうかしましたか」

女は人込みの中を谷中の方へ歩きだした。三四郎もむろんいつしよに歩きだした。半町ばかり来た時、女は人の中で留まった。

「私心持ちが悪くって……」

三四郎は往來のまん中で助けなき苦痛を感じた。立つて考えていた。

「どこか静かな所はないでしょうか」と女が聞いた。

「もう一町ばかり歩けますか」と美禰子に聞いてみた。

「歩きます」

二人はすぐ石橋を渡って、左へ折れた。人の家の路地のような所を十間ほど行き尽して、門の手前から板橋をこちら側へ渡り返して、しばらく川の縁を上ると、もう人は通らない。広い野である。

「ありがたい。だいぶよくなりました」と言う。

菊人形で客を呼ぶ声が、おりおり二人のすわっている所まで聞こえる。

「ずいぶん大きな声ね」

「朝から晩までああいう声を出しているんでしょうか。えらいもんだな」と言ったが、三四郎は急に置き去りにした三人のことを思い出した。三四郎は、

「広田先生や野々宮さんはぼくらを捜したでしょう」とはじめて気がついたように言った。

美禰子はむしろ冷やかである。

「なに大丈夫よ。大きな迷子ですもの」

「迷子だから捜したでしょう」と三四郎はやはり前説を主張した。すると美禰子は、なお冷やかな調子で、

「責任をのがれたがる人だから、ちよいどいいでしょう」

「だれが？ 広田先生がですか」

美禰子は答えなかった。

「野々宮さんがですか」

美禰子はやっぱり答えなかった。

問一 傍線部 a～d のカタカナを漢字に改めよ。

a b c d

(注) ○団子坂……東京都文京区の千駄木から谷中に通じる坂。秋には坂の両側に菊人形が展示され、明治期の東京名物の一つだった。
○曾我の討入……曾我十郎と五郎の兄弟が、頼朝の寵臣に仇討する場面。
○一町・一間……距離の単位。一町は約一〇九メートル。一間は約一・八〇メートル。

その調子には弁解の心持ちがある。三四郎はイガイの感に打たれた。今までは霧の中にいた。霧が晴ればいいと思っていた。この言葉で霧が晴れた。明瞭な女が出て来た。晴れたのが恨めしい気がする。

三四郎は美禰子の態度をもとのような、——二人の頭の上に広がっている、澄むとも濁るとも片つかない空のような、——意味のあるものにしたかった。けれども、それは女の機嫌を取るための挨拶ぐらいで戻せるものではないと思った。女は全然として、「じゃ、もう帰りましょう」と言った。厭味のある言い方ではなかった。ただ三四郎にとって、自分興味のないものとあきらめるように静かな口調であった。

(注) ○団子坂……東京都文京区の千駄木から谷中に通じる坂。秋には坂の両側に菊人形が展示され、明治期の東京名物の一つだった。

○曾我の討入……曾我十郎と五郎の兄弟が、頼朝の寵臣に仇討する場面。

○一町・一間……距離の単位。一町は約一〇九メートル。一間は約一・八〇メートル。

「もう気分はよくなりましたか。よくなったら、そろそろ帰りましょうか」
美禰子は三四郎を見た。三四郎は上げかけた腰をまた草の上におろした。その時三四郎はこの女にはとてもかなわないような気がどこかでした。

「迷子」女は三四郎を見たままでこの一言を繰り返した。三四郎は答えなかった。

「迷子の英訳を知っていらしって」

三四郎は知るとも、知らぬとも言いえぬほどに、この問を予期していなかった。

「教えてあげましょうか」

「ええ」

「迷える子——わかつて？」

三四郎はこういう場合になると挨拶に困る男である。咄嗟の機が過ぎて、頭が冷やかに働きたした時、過去を顧みて、ああ言えばよかった、こうすればよかったと後悔する。といって、この後悔を予期して、無理に応急の返事を、さも自然らしく得意に吐き散らすほどに軽薄ではなかった。だからただ黙っている。そうして黙っていることがいかにも半間であると自覚している。

迷える子という言葉はわかったようでもある。またわからないようでもある。わかるわからないはこの言葉の意味よりも、むしろこの言葉を使った女の意味である。三四郎はいたずらに女の顔をながめて黙っていた。すると女は急にまじめになった。

「私そんなに生意気に見えますか」

75

3

80

85

90

95

